

---

# ある傭兵の幻想郷訪問譚

ニャンコ太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある傭兵の幻想郷訪問譚

### 【Nコード】

N8387Y

### 【作者名】

ニャンコ太郎

### 【あらすじ】

これはとある傭兵が幻想郷に迷い込んでしまったお話。

彼は幻想郷の中で傭兵はどのように生きていくのか……

## ある傭兵の回想（前書き）

誤字、脱字などがありましたら指摘して下さると嬉しいです。

## ある傭兵の回想

ええと、一体何から話せばいいか……少し待ってくれ、今記憶の整理をしている所だ。

うん？初めから話せばいいじゃないかって？まあそうだが……お前は理解できるのか？

まあいいか、後で頭に“？”マークだらけになっても知らねえぞ、俺は話し方に何というか……ああいい、自分で言っただけで自分で凹むのは御免だ。

まあ暇だし話してやるか……朝まで退屈だしな、退屈だからって寝るんじゃねえぞ？

「……………やべえなこりゃ」

銃声と悲鳴がひっきりなしに聞こえる中、土嚢に身を隠している俺はそう呟くと体を少し乗り出し現状を確認する。

小さな村の家や荷車……銃弾を防げる物を盾にし森を背に戦っているのは現地のゲリラ兵、対して相手は数も武装も整った政府直属の部隊。

いくら地の利を得ているとはいえ一般人ばかりの貧相な装備しかないゲリラ兵と訓練を受け圧倒的な兵力と充実した装備の正規兵では比べるもがな、ゲリラ側が不利なのは明確だった。

じりじりとゲリラ兵は劣勢へと追い込まれていく。

「もう無理だ逃げろっ！撤退だあっ！」

「ダダダダダダッ！」

「ドシュツ！」ぐぎゃっ……………」

「ぐあっ！」

「ぎゃあっ！」

ゲリラの最前線で戦っていた隊長と思わしき男がこれ以上は持たないと判断したのか大声で叫ぶと隠れていた物陰から飛び出して森の方へと駆けて行く。

しかし敵に背を向けてそんな堂々と森に走ればいいのだ。彼の後に飛び出した数人の部下と共に仲良く相手の機銃に八子の巣にされ体中から血を吹き出して地面に倒れた。

……………そう、ここは戦場。

そして俺は……………ゲリラ側に雇われた傭兵だ。

名はカイナ・レイスター、出身地は……………ヨーロッパのどこかだけ言っておこう。

身長は百八十一、体重は六十九、目の色はブルー、髭は剃らない主義……………というか戦場で剃ってる暇がないから習慣がつかなかったただけだ。

職業は先程言った通り傭兵、基本は紛争地帯を転々としてるがその他にも密輸、誘拐、護衛、暗殺と金が入るんならどんな仕事でも手広くやっている。

外道だなんて言うなよ？こっちは生きてく為の技能をそっち方面しか教わらなかつたんだからよ……………仕方無えだろ？

つと、俺の自己紹介なんぞしてもしょうがないな、話を戻そう。

「おい通信兵……あんたらの隊長様からの連絡はまだか？」

「そ、それが全く繋がらないんです！敵の妨害にあっているんでしようか？」

「ハア……畜生が」

ガタガタ震えながらそう聞いて来る俺の横に居るまだ若い……って言っても俺も若いぜ？おっさんって年齢じゃあ無いからな俺は、せいぜい見られて二十代後半……何度も言うがもつと若いぞ？

まあそれはさて置き横でガタガタ震えてる通信兵に呆れ顔で聞いた結果がこれだ。

こつちが聞いたのに疑問形で返すなってんだ、俺だってそんな型の古い通信機なんて使い方知らねんだよ。

一応ゲリラとはいえ兵士なんだから落ち着けてんだ馬鹿野郎が、まあ叫び声をあげた上無防備に立ち上がって逃げ出さないだけマシか……単に腰が抜けて動けないってのもあるかもしれねえけど。

「ドオン！」

「うおっ！？」

「ヒィッ！」

僅か数メートル隣の荷車を盾にしていた奴らが荷車ごと吹っ飛ばされ流石の俺も驚きの声をあげる。

迫撃砲まで持って来てやがるのか……ゲリラに対して随分と豪勢なモンを用意してくれるもんだ。

次々に降ってくる迫撃砲に物陰がまた一つ、一つと吹き飛ばされていきそこに隠れていた兵は悲鳴をあげる事すら許されずに死んでいく。

「指揮官が居ないぞ！」

「何だと!？」

「俺達はどうすればいいんだよ！」

それと同時に仲間内が騒がしくなる、指揮官が撤退命令も出さずに逃げたらしい……兵士が動揺するのも無理は無い、指示を出すものが居ないという事は既に俺達は統制の取れていない烏合の衆と同じだからだ。

慌てふためく兵士達、鳴り響く迫撃砲の爆発音……既に戦闘どころではない状況になってしまっていた。

「ふう……退却すつか」

「……え？」

「勝ち目はゼロだ。こっちは何もかもが劣ってやがる……ここに居たって無駄死にするだけだ」

俺はその光景をまじまじと見ながら大きなため息をついた、なんせ迫撃砲がある時点でこっちは地形もクソも無い。

物陰に隠れようが家に立て籠ろうが隠れている物ごと吹っ飛ばされちゃあ隠れる意味が無いだろ？

こんなポンポン物陰に落とされてるんだ……多分俺が隠れているここもじきに砲弾が落とされるだろう。

そんならさつさと逃げた方が吉だ。迫撃砲が落とされる順番待ちなんて真っ平御免だからな、命はそんな軽くねえ。

俺はそうと決めると物陰から物陰へと素早く移動して森の方へと退却を始めた。

逃げている途中ちらと周りを見てみると既に顔面蒼白で逃げている兵がかなり居る、かなり焦った表情……これは焦るといふより生存本能のままに逃げ出してるって方が正しいか。

まあ逃げ出したい気持ちも分らない訳でもない、現に今俺は逃げ出そうとしている所だからな、しかしそんな相手に見えやすい所で走ると……

「ダダダダダダッ！」

「ぎゃあっ！」

「ぐあっ！」

……前にも言った気がするが、いい的だ。

戦場では本能に吞まれたら待つているのは死の方が圧倒的に高い、例えるなら慌てて見晴らしのいい所に躍り出て本能まがむしやらに逃げる獣が銃を持ったマタギに狙われて易々と逃げおおせるか……と言った所だ。

そんな哀れな屍達を背に俺は森へと向かいほぼ弾の当たらないと思われる地点まで行くと立ち上がって急ぎ森の中へ駆け込む。

こちらから戦場が見えなくなる所まで走ると足を止め振り返る、追っても無いようだしここまで来ればとりあえずは安全か……しかし今回の依頼は色々依頼主の言っていた事との相違点が多かったな。まあこの稼業を続けているあたりこんな目に遭うのは良くある事なんだが……

とりあえず依頼主がこの指揮官を殴らんと気が済まねえ、こいつは明らかに故意だ。

こっちはビジネス、金で雇ったからといって使い潰されてはいいそうですかという訳にゃあいかない。

それが裏で黒い取引がなされた巨大な傭兵供給機関ならともかく俺のように部隊も持たず小規模、または個人でやってる奴等にとつては文字通りの死活問題だ。

「ふう、ふう……待つてくださいいい〜」

「あ？お前生きて来れたのか」

「ひ、酷いです……何とか運良くここまで来れました」

そんなやり場のない怒りでもややもやとしていると先程俺の隣に居た通信兵がよたよたと走って来た。

良くこんな走りで撃たれずに済んだもんだ……慌てて逃げる奴よりもインパクトがあったぞ今の走りは。

俺の近くまで来ると立ち止まりゼイゼイと肩で息をする通信兵、背中を見てみると穴だらけになり煙をあげている通信機……うむ、通信機は彼を守って名誉の死を遂げた訳か。

慌ててこのクソ重い通信機を捨て忘れたお陰で命を拾ったか、運がいい奴だ。

「運がいいな、逃げ足を遅くする通信機を背負ってたお陰で助かるたあな」

「え？通信機は重いから捨てた筈……あれ？」

「おいおい……」

呆けた顔で背中に背負った通信機を触って間抜けな声を出す通信兵……ああ、阿呆なお陰で助かったのか。

まあこういう奴は意外と生き残ったりするからな……全く不思議なもんだ。

「あ、あれ？脱げない！？一体どうなってるんですかこれ！」

「……まずは腹に巻いてあるベルトを外せ」

「あ……」

そんなこいつのどこか間抜けな姿を見て俺は心が幾分か和らいた。こいつ戦場に一人いればPTSDになる兵士減るんじゃないかねえか？ いいムードメーカーになりそうだ、まあこの間抜けさがコイツに牙を剥く可能性の方が圧倒的に高いんだろっかな。

そんな事を考えている俺の横で何故かベルトと格闘している通信兵に苛立ち持っていたナイフでベルトを切ってやった後俺は頭を切り替えこの後の事を考える。

今や銃声は微かにしか聞こえない。銃声が聞こえないような距離まで逃げたとは思えないのでこちらが撤退したと考えて間違いないだろう。

しかし指揮官が居ないとはいえ全員と足並みを揃えて逃げ出さずに来た訳だ。当然俺は此処の土地勘なんて無い。隣に居る奴は完璧に役に立たねえ、断言出来る。

この状態だと下手をすると森の中を数日間彷徨う羽目に……というか死にかねない、それは避けたいもんだ。

「まあ運を天に任せてこの森を抜けるしか……」

「アニキ！アニキ！無事でしたかあ！」

「ん？その声は……」

そう思っていた俺の耳に聞き覚えのある声が聞こえたかと思うと草陰をかき分けて大柄の筋肉質の黒人男性と多数のゲリラ兵が現れた。どうやら無駄な心配だったようだ。

俺をアニキと呼んだ大男は涙目になりながらその小さめの丸太のような腕で俺の肩を掴む。

「アニキ！アニキ！いつの間にか居なくなってたから心配してたんで

すよー！」

「「ミチミチ……」うぐおっ！」

ミシミシと俺の肩が危険信号を発している……心配してくれたのは嬉しいが力加減を考える馬鹿と言いたい。

「そろそろ止めねえと骨が折れるんだが……」

「あ、すいませんアニキ」

はつと我に返ったような顔をして腕を離す大男、毎度力加減は考えろと言ってる筈なんだがなあ……

……ん？こいつの名前が聞きたい？

こいつの名前はベン・カーヴァー、言った通り黒人の大男だ。

身長は確か二メートル二十四センチだったかな？頭に巻いたバンダナがチャームポイントだ。

そのバンダナなんだが実はかなり色褪せちゃあいるがこいつの国の国旗なんだが……その事は言わないでやってくれ、あいつは母国があんまり好きじゃないんだ。

嫌いになる程って一体どんな国かって？そうだな……“正義と平等”って言葉が銃声と殺戮の上で叫ばれる国……って感じの国だ。

何でそんなもん付けてるかって？……形見があれだけなんだとよ、肉親のな。

まあそんな事はどうでもいいだろ？知った所でここじゃあ何の役にも立つもんじゃあ無いからな。

こいつの特技？……力仕事だな、こいつに力仕事をさせて右に出る奴は早々見つからないぞ。

聞いて驚け、こいつはベンチプレス四百二十キロの記録持ちなんだ。……反応が薄いな、良く分からないか？まあ分かりやすく言えば普

通の男の数倍の力を持つて考えりゃあいい。

コイツの肉体の異常な硬さは身をもって味わった訳だから説明は要らないか。

火力の高い銃を至近距離から食らわすか急所にぶち込まねえ限りこいつに致命傷なんて無理な話だ、全くこいつのタフさを見てると実はターミネーターなんじゃねえかと思う時があるぐらいだ。

…… ああ、その反応はターミネーター知らねえな？ まあこんな辺鄙な所じゃ電波放送なんてやってる訳ねえか。

あいつの紹介はここら辺までだ、本題に戻るぞ。

弟分のカーヴァーと撤退したゲリラ兵に合流した俺達はその後本隊へと合流を果たした。

「やっぱり俺達は捨て駒だったか……」

「みたいですねアニキ」

「まあ行き帰りぐらいの路銀は持つてる、今回は運が悪かったと思つて帰るか」

本隊…… という名の指揮官クラスのみの部下に知らせず撤退をしていた奴等と合流して数分後、おれはそいつらと“話し合い”をした結果一枚の報告書を渡して貰う。

俺は指揮官が持っていたお偉いさんからの報告書を一通り見た後握りつぶすと近くにあった藪に抛り捨てた。

その報告書の内容はまあ分かり切っていた事だが……俺達を捨て駒にする事が書かれていた。

通りで戦い慣れてないというか……素人臭さが抜けてない連中ばかりだった訳だ。戦力になりそうにない奴をかき集めて作ったんだか

らな。

始まってもう長くなるこの紛争地帯にしては妙だと思っただけはいたんだがな……まあ終わっちゃまった事をグダグダ言っても意味は無え、過去を振り返るのは大事だが過去ばかり見つめて固執しちまっても前に進むことは出来ねえからな。

「こ、これは我々の勝利のために必要な犠牲なのだ！よそ者のお前が偉そうに「ガスッ！」えぐうっ！」

「ふん、へえ……で、あんた等は勝利の為、俺達が犠牲になつての間にとつと逃げて作戦完了しようとした訳ですか……」

「ぐふっ……ゆ、許してくれ……上の命令には逆らえな「ドガッ！」えぐう！」

「つたく、ただのカスじゃねえか……国民の権利の回復を願って反乱した奴等がその立ち上がった奴等を道具同然に使い捨てるたあ……この政府と同じ穴の貉じゃねえか」

因みに俺が受けた依頼の内容はゲリラ軍を援助してくれって奴だった、こいつを終わらせば報酬金を貰えるはずだったんだがな……。ここの任務は住民が居なくなつた廃村の一つに駐屯している補給部隊を潰す……というものだったのだがその実そこに居たのは小部隊などでは無く反乱軍の作戦で引きずり出された掃討に向かつてる装備万態の大部隊。

俺達を囷にして手薄になつた拠点を奪取するという作戦だったらしい。

つたく、最後の最後でこんななんてなあ……働かせるだけ働かせて金も払わず使い捨てる気満々だったって訳だ畜生。

覚えてるよこの野郎、<sup>クライアント</sup>国に帰ったら政府軍にためえ等の情報売つてぶち殺しにいつてやる。

しかしこのゲリラ軍には他の部隊に俺の同業者の知り合いがいくらか居たんだが……大丈夫かねえ。

……まあ死にそうになってもなんやかんやで生き残りそうだ。悪運強い奴等ばかりだからな。

……話を戻そう。俺達が捨て駒にされるのは隊長クラスの上官以外は知らなかったようでその事実を知った彼らは俺がそいつ等を殴ろうが蹴ろうが恨みのこもった目で見ているだけだった。

まあ当たり前だわな、こいつらは政府の腐敗に目を当てられなくなり国に反旗を翻した連中だ。

少々やり方が横暴すぎるとはいえこの国の未来を憂いて立ち上がった奴等だ、こいつらはそんな彼らの思いを踏みにじったようなものだから当然と言えば当然の報いだろ。

まあこんな事したのはは思いっきり私情が入ってたからなんだがな……前に過去云々言った気がするが我ながら未練タラタラだぜ。

いや、未練と過去は違う……と思っておきたい。

あ？同じだろうって？……そこは黙っておくもんだぜ。

「さて、あんた等は どうする？」

俺はほぼ原形をとどめていない程に膨れ上がった上官共を一瞥するとゲリラ兵達の方を見た。

皆意気消沈したような顔で俯いたり涙を流したりしている。

そしてその中の一人が意を決したように顔を上げて一歩前に出た、そして俺の顔をキツ、と見つめる。

「我々は……彼らを連れて拠点へと帰還します」

「なんだ、こいつらは置いて行かないのか？」

「このような者達でも同志であり、上官であります故……」  
「難儀だねえ、こういう組織ってのはどこも」

兎に角俺はここで離脱だ。報酬は貰いそびれたが、生き残るのに重要な情報を正しく伝えないような所に帰るなんて真つ平御免だからな。まあこんな作戦に出すような奴等だから元から金なんざ払うつもりも無かつたんだろうが……  
わざわざこんな所で仕事するよりも割安にはなるものの仕事をくれるクライアントはいくらでも居る。

「それじゃあ俺は比較的安全なお隣の国まで逃げるわ」

「そうですね……ご武運を」

「それ普通俺がお前らに言う台詞じゃねえか？」

そう返すと笑い声がおきた。こいつらの行く末はどうなるか知らないが今は自分の心配だ、暖かい風呂と美味しい飯を求め俺は上官からかっぱらった地図を基にゲリラ兵達に背を向けて国境へと足を向け……

「ガララララララ……」

「……ん？」

俺はゲリラ兵達の後ろの方から聞こえる僅かな音に耳が反応する。遠くから聞こえるこの音は……分からない筈が無い、藪や樹木を無理矢理へし折る音と共に近寄って来るこの音は……キヤタピラの音だ。

間違はなくこちらに向かってきている、段々と大きくなる音は嫌でもゲリラ兵達の耳にも入ったらしくこの地鳴りのような音に動揺している。

「嘘だろオイ！」

戦場、キヤタピラ音……導き出される答えは一つ、そう……戦車以外無い。

これで作業用ブルドーザーが出てきたら盛大にずっこけてやるつもりだが音の正体を確認するまでブーツと突っ立っている訳にはいかない、戦車とやり合うならジャベリン……いやせめてRPGを持った歩兵が居なきやあ相手にもならない。

「てめえら逃げる！」

俺がそう叫ぶと同時に茂みの奥から飛んできたのは鉛玉、一点に固まっていたゲリラ兵達は次々と撃ち殺されていく。

それと共に踊りだしてくる数十人の政府軍の兵士と木々をなぎ倒して現れる戦車……そして続くように現れる装甲車……ってどんだけ殺しに来てんだこいつ等は！歩兵しかないゲリラ共に対する武装じゃねえだろ畜生めが！

「うわああああ！」

「ひいいい！」

「なっ！？てめえらなんでこっちに来んだ畜生！」

「ガラララララ……」

「うおおおおおー！」

その中で何とか弾を避けた兵士達が俺の方へと走って……って待ちやがれ！逃げろと言ったがこっちへ逃げろとは一言も言っただけぞ！しかし逃げてきてしまったものは仕方が無い。俺はゲリラ兵達を先

導するようにながむしやらに森の奥へ奥へと逃げ込んで行った。

その時注意してりゃあ分かったのかも知れねえな……

生い茂る木が、踏みしめる地面が、俺達の周りにある空気全てが……

…いつの間にかガラリと全部変わっちまってた事に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8387y/>

---

ある傭兵の幻想郷訪問譚

2011年11月24日23時54分発行